

平安宮

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



平安宮推定復元図 梶川敏夫画

平安宮は古代都城として最後に造営された宮室である。現存する宮城図から復元できる平安宮の構造は、律令制古代国家を具体的に示したものと見え、前代から様々な変遷をみせた宮室構造の到達点として捉えられる。

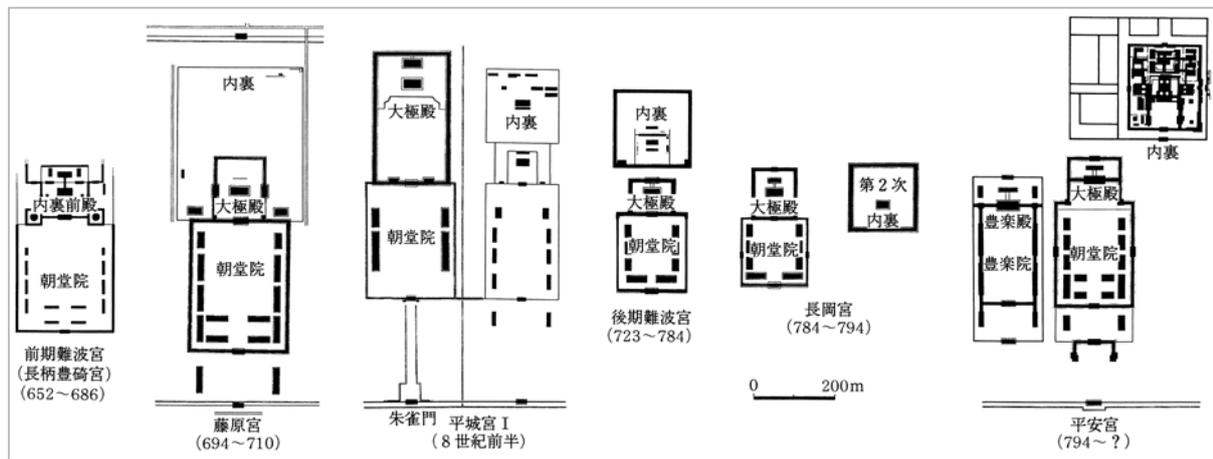
平安宮は、官内諸施設の分析から南北2区画に分けることができる。南半は朝堂院を中心とした公的空間、北半は内裏を中心とした天皇の私的空間となる。朱雀門を入ると正面が朝堂院である。朝堂院は八省院とも呼ばれるように、も

もとは二官八省の政務が行なわれた場所である。しかし、律令体制の整備とともに政務が複雑化し、実質的な政務は朝堂院の周囲に配された役所で執り行なわれるようになる。平城宮朝堂院では政務と儀礼が未分化のまま執り行なわれていたとされているが、平安宮朝堂院では政務から離れて儀礼的空間へと移っていったと考えられる。これらの事実は大極殿院の構造的変化や内裏との関係からもうかがえる。

古代宮室としては最も古式な建物構成が判明した前期難波宮では、

内裏と大極殿院が未分離の状態にある。内裏が大極殿から分離するのは長岡宮からであるが、天皇が出御する大極殿は前代と同じく朝堂院とは明確に区別されている。ところが、平安宮では朝堂院と大極殿院を分ける大門と回廊がなくなり、龍尾壇(段差)が設けられるだけとなる。平安宮大極殿は朝堂院に包括されており、即位や朝賀などに御した天皇が諸官人とともに同一空間を共有する国家的儀式の場として機能したのである。

これに関連して、天皇の私的儀式



内裏・朝堂院の変遷 (町田章作図「古代の宮殿と寺院 古代史復元8」講談社 1989) を一部改変

が執り行なわれる中和院が、朝堂院の北方に新たに造営されていることは興味深い。朝堂院の東、内裏の南には式部省・民部省・太政官・中務省と律令政治の重要な実務官司が配されており、内裏が朝堂院の北東に位置するのは、天皇の日常政務の場としての内裏とこれらの中央官司との位置関係が重視された結果とも考えられなくはない。それは、国家的儀式の場である朝堂院と天皇の私的儀式の場である中和院が、南北に並ぶ事実と対応しよう。内裏が天皇の私的空間であるとともに政務を行なう公的空間としても機能しはじめた平安宮では、前代の宮室から発展してこのような合理的な諸院・諸官司の配置が認められるのである。

さらに、平安宮では朝堂院の西に隣接して豊楽院が新たに造営される。豊楽院は、国家的あるいは公的性格の強い饗宴の場として造営されたことが明らかにされている。このような饗宴の場では、朝堂院での儀式以上に天皇と臣下の一体感が求められ、天皇が出御する豊楽殿と朝廷を囲む諸堂の間には朝堂院のような龍尾壇は設けられなかつ

た。平城宮の第一次朝堂院は、一般的な朝堂院の構造とは異なり平安宮豊楽院と共通する4堂配置の施設であることが明らかとなっている。第一次大極殿院は後には内裏に改修されており直接豊楽院の系譜をたどることができないが、平城宮第一次大極殿院と朝堂院の国家的儀式・饗宴の場としての機能が平安宮に継承され、豊楽院が朝堂院の西に造営されたと推測できる。

1994年6月、千本丸太町上る千本通りの試掘調査で、はじめて大極

殿基壇の痕跡が確認された。平安宮の発掘調査はまだ緒についたばかりで、実態は部分的にしか把握されていない。それでも、大極殿回廊や豊楽殿基壇さらには内裏内郭回廊の検出など注目すべき成果が挙げられている。いままで平安宮の研究は、宮城図なども含めた文献史料の分析が中心であった。しかし、文献史料だけでは解明できない問題も多く残されている。平安宮造営当初の復元など、これからの平安宮研究に対する発掘調査の意義は大きいといえる。(網 伸也)



豊楽殿基壇 (北東から)